

鐘

小川未明

青空文庫

ケーまち
K 町は、昔から鉄工場のあるところとして、知られていました。町には、金持ちが、たくさん住んでいました。西の方を見ると、高い山が重なり合つて、その頂を雲に没していました。そして、よほど、天氣のいい日でもなければ、連なる山のすがたを見つゝすることができなかったものであります。

その山おくにも、人間の生活が、いとなまれていました。ひとりの背の高い、かみのぼうぼうとした、目ばかり光る、色の黒い男が、夏のさかりに、大きな炭俵をおつて、このけわしい山道を歩いて、町へ売りにきました。じぶんが木をきり、そしてたいて製造したものを、売りに出て、その金で、食べ物や、着る物を買つて、ふたたび山へはいるにちがいありません。それは、いくらかせいでも、しれたものです。これだけで、人間が、一年じゅうの生活をすると考えると、ひとつの炭俵にも、命がけのしんけんなものがあるはずでありました。

ある夏のこと、男は、汗をたらして、重い炭だわらを二つずつおつて、山をくだり、これを町のある素封家の倉へおさめました。この家は、けちんぼということで、町でもだれ知らぬはなかつたのです。そのおさめ終わつた日に、男は代金をせいきゆうしますと、

おさめた俵たわらかず数かずより、二俵ひよすく少なく、これしかうけとらぬから、それだけの代金だいきんしかは
らえないというのでした。

「そんなはずはない、十俵びよういれました。」と、男おとこは庭にわさきにつつたつて、いいました。

「八俵びようしか、いれてない。そんないいがかりをつけるなら、倉くらにはいつてかぞえてみるが
いい。」と、主人しゅじんは、いたけだかになりました。

男おとこは、山やまを五たび下くだつて、またのぼったきおくがあります。それで倉くらにいつて、数かずをか

ぞえてみると十いれたものが、八つしかなかった。かれの顔かおは、土色つちいろとなりました。し
かたなく、八俵びようの代金だいきんをふるえる手てで、うけとると、おそろしい顔かおをして、このいかめ
しい門もんのある家いえをみかえつて出ていきました。

男おとこは丘おかの上に立たつて、K 町ケーまちを見みおろしながら、

「死しんでも、忘れわすれやしねえぞ。」といった。

そのとき、少年しょうねんは、かれのみすばらしい、いかりにおののいた姿すがたをみたのです。目め
の下したに、林はやしのごとく立たつた、えんとつからは、黒くろいけむりが、青あおい空そらにのぼつていました。
その後ご、だれの口くちからともなく、うわさにのぼつた、金持かねもちが、山やま男おとこの炭代すみだいをこ
まかしたというのをきいたとき、少年しょうねんは、ある日ひ、けつして、男おとこは、気きがくるつてい

たのではないのを知りました。そして、この素封家の前を通るたびに、いかめしい門をにらんだのであります。

「あのしんだいで、そのうえ、鉄工場の、利益配当が、たくさんあるのに、なんで、山男の炭なんかをごまかすような、けちなことをするのか。」

こういう、人の話をきくときに、少年には、みすばらしい、いかりにもえた、山男の姿が、目にみえたのでした。

他国の寺から、大きなぼん鐘をこの町でひきうけたのは、それからのちのことでありました。

「大きなもんだそうだ。他の工場では、どこでもつくり手がないというので、この町へあつらえにきた。なにしろ寄進の金で、できるのだそうだから、この町の工場でも、職工にいいつけて、念をいれてつくつているということだ。」

こんなことばが、少年の耳にはいったとき、人のまねることのできない、どんな芸術品がうまれるだろうと、いろいろの美しい、鐘の形を、そうぞうにえがきました。

それは、ちようど、夏も、やがていこうとするとするところであります。

「大きな鐘が、できあがつて、港まで、車に乗せて、引かれていき、そこから船で、あち

らへ送られるのだ。」と伝わりました。

「町じゆう、たいへんなさわぎだというから、ぜひ、けんぶつにいかなくてはならぬ。」と、村の人たちもいました。

その日、少年にとつて、昼まへは、いそがしくて出られませんでした。いまごろ、鐘を引く行列が、町を通るであろう昼すぎになって、町へいこうとした、そのじぶんから、きゆうに天氣があやしくなりました。つめたい風が、ふきだして、木立の葉や、たんぽにうわっている、とうもろこしの葉うらをかえして、それがなんとなく不安に、銀のごとく白くきらめいていたのです。

「降るかもしれないが、いつてみようかな。」

少年は、ちゆうちよしましたが、ついに、灰色の雲のせわしように、頭の上を走る野原をひとびに走って、町へいきました。さすがに、両がわに、人は黒山のごとく集まっています。人をおしわけて、

「どんな、大きい、みごとな鐘か？　どんな、形をしているか？」

少年は、のぞいてみようと思いました。そして、かれは、なにをみたでしょう？　いく十人か、かき色の着物をきた、囚人が、列をなして、なわにすがり、それを引

いていたのです。

「あつ……。」という、おどろきが、少年しょうねんの口くちから出でました。もうそれをみる勇氣ゆうきもなく、しおしおとして、かれは、さつききた道みちを、村むらへもどりしました。

「なんで、囚人しゅうじんになんか、引ひかせたのだろう？」と少年しょうねんは、晩ばんがた町まちから、見みてきた年としよりにむかつて、たずねました。

「賃金ちんぎんが、やすいからだろうが、あんなことをさせるのは、むじひだ。」

年としよりは、こうかんたんにこたえました。このじぶんから、いよいよ雨あめがふりだした。鐘かねは、船ふねにうつすさいに、すべって、板いたをころがると海うみのなかに落おちてしまったそうです。その話はなしが夜よるになつてから、町まちや村むらを、びつくりさせました。

落おちた鐘かねは、海うみが深く、下したに岩いわが多いために、ありかをさぐったけれど、わからず、それきりになつてしまつたが、ふしぎなことは、とうぎ、あらしの日ひに、海うみがあると、どこからもしれず、海うみのなかから鐘かねの音ねがきこえたことです。

しかし、それも月日つきひがたつと、鐘かねの音ねも、うわさとともに、きえていききました。

ただ、たねだけは、いつか芽めが生はえ、その芽めはのびるものです。少年しょうねんは、大おおきなつてから、この町まちの工場こうじょうに働はたらいて、正義せいぎと自由じゆうのために、たたかう身みとなりました。

そしてつかれると、かれは、丘^{おか}にあがった。すると、みすぼらしいふうをした山^{やま}男^{おとこ}が、
いかりにおののいて、

「死^しんでも、忘^{わす}れやしねえぞ！」ときけんだ、姿^{すがた}が目^めにみえて、かれをうちのめしました。

また、海岸^{かいがん}に立^たつて、ぼうぜんとして、ため息^{いき}をつくど、どこからともなく、鐘^{かね}の音^ね
が、きこえて、すげがさをかぶった、囚^{しゅうじん}人のむれが、くもの子^このごとく、なぎさにう
ごめくまぼろしがうかびました。

「よし、たたかうぞ！　なんで忘^{わす}れるものか。」と勇^{ゆう}氣^きをとりかえして、さけぶと、たち
まち、あわれな囚^{しゅうじん}人^{ひと}たちの姿^{すがた}は、白^{はく}鳥^{ちよう}となつて、夕^ゆやけのする、空^{そら}に舞^まいあがり、
ようようとして、つばさをかがやかして、とぶのでした。ただ、鐘^{かね}の音^ねばかりは、しおの
色^{いろ}が、くらくなるまで、いつまでも、なりやまなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「童話の社会」

1930（昭和5）年9月

初出：「童話の社会」

1930（昭和5）年9月

※表題は底本では、「鐘《かね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鐘

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>